

説教題: **教会に忠実に仕える / キリストのために忠実に苦しむ**

聖書朗読: ペテロの手紙第一 4章 7-19 節

⁷万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。⁸何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。⁹つぶやかかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。¹⁰それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。¹¹語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

¹²愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、¹³むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。¹⁴もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。¹⁵あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行なう者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。¹⁶しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。

¹⁷なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょうか。¹⁸義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。¹⁹ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。

皆さん、おはようございます。今日、また皆さんにお会いできてうれしいです。先週、私たちはペテロの手紙第一 4章の最初の 8 節を見ました。先週の説教では 7 節と 8 節も含めました。これらの節は実際には章の次のセクションに属しており、7 節から 11 節です。

1 ペテロ 4:7-10 – 「⁷万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。⁸何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。⁹つぶやかかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。¹⁰それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」

この章は「万物の終わりが近づきました。ですから、...」という言葉で始まります。先週お話ししたように、「万物の終わりが近い」というこの言葉は、歴史の終わりやキリストの再臨がまさに今すぐに起こるという意味ではなく、むしろ現在の教会の時代が始まっており、いつでも終わる可能性があるということであり、私たちはそれに備え、キリストがいつ来てもよいという期待をもって生きなければならないということを伝えています。

マタイの福音書 24:42-46、イエスがご自身の再臨について語られる箇所–「⁴²だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。⁴³

しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。⁴⁴だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。⁴⁵主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。⁴⁶主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」

私たちは常に警戒していなければなりません。私たちは常に彼の再臨に備えていなければなりません。キリストに忠実で分別ある僕とは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの働きを積極的に行う者です。そしてペテロの手紙第一 4 章 7 節から 10 節で、ペテロは私たちキリストの弟子が従事すべき主要な活動のいくつかを教えてください。

これらの節をもう一度見ましょう – 「⁷万物の終わりが近づきました。 **ですから、** :

7 節 – 「祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」

8 節 – 「何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」

9 節 – 「つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。」

10 節 – それぞれが賜物（これらを御霊の賜物と呼んでいます）を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。

これらは私たちが関わるべき主要な活動のいくつかです：**冷静な心で祈り**、互いに熱心に**愛し合い**、互いに**もてなし**、受けた**霊的な賜物を用いる**こと。

私は先週、7 節と 8 節についてコメントしました。7 節では、効果的な祈りをするために、私たちは冷静な心と思慮深い判断を持たなければなりません。

8 節は「何よりもまず」と言っています。これは私たちの関係や活動において最も重要なことです。「互いに熱心に愛し合いなさい。」クリスチャンは互いに愛し合うべきです。そして互いに赦し合うべきです。エペソ 4:32 – 「³²お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」

1 ペテロ 4:8 の後半 – 「... 愛は多くの罪をおおうからです。」私たちが憎しみや復讐を選ぶのではなく、愛し赦すことを選ぶとき、これは苦い感情を取るに足らないものに消え去らせる傾向があります。

9 節 – 「つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。」私たちは互いに親切であるべきです。しかし、私たちはまだ皆不完全であるため、あなたが誰かに親切を示しても、その親切が返されないことがあるかもしれません。そのようなとき、人は苦々しく感じた

り、不平や愚痴を言いたなったりする傾向があるかもしれません。しかしペテロは、親切を続け、不平や愚痴を避けるようにと私たちを勧めています。互いに愛し、赦し合い続けましょう。

10 節 – 「¹⁰それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」 私たち一人ひとりは、第一コリント 12 章が教えているように、霊的賜物を受けています。そして、第一コリント 12 章 7 節が言うように、私たちはその霊的賜物を互いに仕えるために用いることになっています。このようにして、私たちは『神の多様な恵みの良い管理者』となるのです。』 The New International Version (NIV) はこの節を、私たちは神の恵みをそのさまざまな形で忠実に管理するべきだと訳しています。神の恵みはさまざまな形で、多くの人々を通して現され、教会を建て上げるために用いられます。それは、キリストの福音の証人として社会に仕える忠実な弟子たちの共同体です。

エペソ 4:11-13a – 「¹¹こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。 ¹²それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、^{13a}ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、…」

1 ペテロの手紙 4 章 10 節および 1 コリント人への手紙 12 章における「賜物」というギリシャ語は、カリスマ (*charisma*) です。それは「恵みの賜物」という意味であり、私たちはしばしば「霊的賜物」と言います。なぜなら、これらの恵みの賜物は神の聖霊から私たちに与えられるからです。

1 コリント 12 : 4 - 14 を読みましょう – 「⁴さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。⁵奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。⁶働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。 [これらの三つの節に三位一体のすべてのメンバーが言及されているのは興味深くありませんか：第 4 節では聖霊、第 5 節では主イエス・キリスト、第 6 節では神なる父。そして、私たちは様々な賜物、様々な務め、様々な効果があると教えられています。] ⁷しかし、みな益となるために、おのおの (クリスチャン) に御霊の現われが与えられているのです。 [ご注意ください：私たちはそれぞれ少なくとも一つの賜物を受けますが、それを自分のために保持するのではなく、その賜物は共通の善のために、教会の共同体を築くために用いられるために与えられるのです。] ⁸ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、⁹またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、¹⁰ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。 ¹¹しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくだ

さるのです。12ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。13なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。14確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。」

教会には様々な人々があります—ユダヤ人や異邦人、奴隷や自由人—しかし私たちは皆「一つの体にバプテスマを受けた」のであり、それゆえ私たちは一致を示すべきです...そして私たち一人ひとりが「一つの霊から飲むようにされている」のです。11節では、唯一の聖霊が各クリスチャン一人ひとりに、それぞれの賜物を聖霊の意志（自分の意志ではなく）に従って分配します。14節では、体は統一されていますが、私たちは多くの個々の存在であり、共に働いて体を築き、世界への証人となるのです。

聖書注解者トマス・シュライナーが言うことを読ませてください：

すべての信者は少なくとも一つの賜物を持っているにもかかわらず、賜物は必ずしも同じではありません。神の恵みは「さまざまな形で」現れ、そのため賜物の多様性は神の恵みの多面的な性質を明らかにします。もちろん最も重要なのは、賜物を持つ目的です。賜物は、信者が自分の能力を自慢するために与えられるものではありません。それらは「他者に仕えるため」に授けられます。...重要なのは、霊的な賜物は他者に仕え、助け、信仰の中で他者を強めるために与えられるということです。それらは奉仕のために授けられ、自尊心を高めるためではありません。パウロも同じテーマを強調し、信者たちに賜物は自分自身を高めるのではなく、他者を建て上げ、励ますために与えられることを思い起こさせています（1コリント 12:7,25-26;14:1-19,26;エペソ 4:11-12）。信者が自分の賜物を用いて他者を強めるとき、彼らは神の恵みの「良い管理者」（NRSV, *kaloi oikonomoi*）として機能しているのです。...霊的な賜物は基本的に特権ではなく、責任であり、神が授けたものに忠実であるよう呼ばれているものです。

最後の2つの文をもう一度読みましょう：「信者が自分の賜物を用いて他者を強めるとき、彼らは神の恵みの『良い管理者』として機能しています。...聖霊の賜物は本質的に特権ではなく、責任であり、神が与えたものに忠実であるよう呼びかけられています。」私たち一人ひとりが、キリストの体である教会を建て上げるために、神が与えてくださった賜物を忠実に用いることができますように。霊的な賜物についてもっと知りたい方は、私の説教「奉仕の場」をぜひご覧ください。

ペテロに戻り、1ペテロ 4:10-11を読みましょう – 「¹⁰それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。¹¹語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。」

それによって、すべてのことにおいて神がイエス・キリストを通して栄光を受けられますように。栄光と支配はとこしえに彼に属します。アーメン。

これは私たちが行うすべてのことにおいて焦点であるべきです。私たちは他の人々に仕え、彼らを神の御国に導くことを目指すだけでなく、私たちが行うすべてのことが、イエス・キリストの福音の宣言とキリストの弟子たちの共同体の築き上げを通して神に栄光をもたらすものでなければならないことを忘れてはなりません。

4章の次のセクションに進みましょう。

1ペテロ 4:12-14 – 「¹²愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、¹³むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。¹⁴もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。」

これは、私たちにペテロの手紙第一 1章 6-7節およびヤコブの手紙 1章 2-4節で読んだことを思い起こさせます。どちらも、困難な試練は私たちの信仰を試し、精錬するために訪れることを教えています。これに不思議なことは何もない、とペテロは言います。

使徒パウロは、このことを2テモテ 3:12で言っています – 「¹²確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」

そしてパウロは、このことをローマ 5:3-5で言っています – 「³そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、⁴忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。⁵この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

私たちは試練において喜びます。なぜなら、試練は忍耐を生み、忍耐は練られた品性を生み、練られた品性は希望へと導くからです。

使徒ヨハネはこのことを1ヨハネ 3:13で言います – 「¹³兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。」

そして主イエスはヨハネ 15:18-20で、弟子たちにこう語られました – 「¹⁸もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。¹⁹もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。」

それで世はあなたがたを憎むのです。²⁰しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがああなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」

これらは、私たちが「キリストの苦しみを分かち合う」いくつかの方法です。

1ペテロ 4:13に戻りましょう – 「¹³むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。」私たちがイエス・キリストのために迫害を受けるとき、私たちはその苦しみにあずかります。そして私たちは勝利に満ちて喜びます—キリストの栄光の最終的な現れが到来し、イエスが再び勝利の王として戻られるときに。

解説者トマス・シュライナーは次のように述べています：

信者が苦しみにどのように応じるかは、言い換えれば、彼らが本当に神に属しているかどうかを示す指標です。実際、将来の喜びの約束は、将来彼らに訪れる喜びを活気づけます。...ペテロは読者に、現在の苦しみに喜びを見いだすよう勧めました。それにより、キリストが再臨されるとき、永遠に喜びと歓喜することができるのです。

1ペテロ 4:14-16を読みましょう – 「¹⁴もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。¹⁵あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行なう者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。¹⁶しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。」

これは2章 19-20節および3章 17節でペテロが言ったことを反響しています。3:17を見てみましょう – 「¹⁷もし、神のみこころなら、善を行なって苦しみを受けるのが、悪を行なって苦しみを受けるよりよいのです。」正しいことを選び、こうして神を敬いましょう。

もう一度1ペテロ 4:16を見ましょう – 「¹⁶しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。」紀元1世紀のこの時期において、キリスト教は違法ではありませんでしたが、キリスト教徒は周囲の信じない人々から批判や迫害を受けることがあり、キリスト教徒が自分の信仰告白から後退し、実際に信仰を否定してしまうという誘惑に駆られることもありました。ペテロは仲間のキリスト教徒に、キリスト教徒として知られることを恥じるべきではないと促しています。

彼はマルコの福音書 8章 38節でイエスが言ったことを反響させています – 「³⁸このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、

父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じません。」

自分をキリスト教徒と呼ぶことを恥じる必要はありません。むしろ、苦しみの中で忠実であり続け、自分がキリスト教徒であることを示し続けることで、神の栄光を現すことができます。

使徒パウロは、2テモテへ1章8節でこの言葉でテモテを励ましました- 「⁸ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをともにしてください。」

私は、2テモテ1章12節でパウロが数節後に言ったことをかなり気に入っています- 「¹²そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。」

この聖句は、私たちがこの世界でキリスト教の証人として、また弟子として直面する困難を続けるように私を励まします。なぜなら、私たちは主イエス・キリストへの信仰の土台と、キリストの日が到来し私たちが報いを受ける未来の永遠の命の約束に立っているからです。

ヨハネの黙示録の2章と3章で、イエス・キリストは七つの教会に向けて七つの手紙をしたため、それぞれの手紙の最後に、あらゆる苦しみを通り抜け、すべての困難を克服した忠実なクリスチャンであり続けた人々への約束で締めくくっています。たとえば、ヨハネの黙示録3章5節から6節を読みましょう。- 「⁵勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。⁶耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』

私たちは、すべての苦難を通して忠実であり続け、最後まで耐え、イエスが私たちのために戻って来られる日を待ちましょう。

次に、1ペテロ4章に戻り、17節と18節を読みましょう- 「¹⁷なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょうか。¹⁸義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。[箴言11:31]」
18節は、ヘブライ語旧約聖書のギリシャ語訳である七十人訳聖書からの箴言11章31節の引用です。

ここでの 17 節は神の家を言及しています。これは旧約聖書の言葉であり、神の民だけでなく神殿も指しています。ペテロはエゼキエル書 9 章とマラキ書 3 章のイメージを借用しています。エゼキエル書では、神はイスラエルの罪人に対する裁きを、神殿内の不忠実な祭司たちから始めます。解説者トーマス・シュライナーを再び引用させてください。

エゼキエル書 9 章では、主はイスラエルの中の罪人たちを裁き、彼の聖所である神殿から始めます。エゼキエル書 9 章 6 節の言葉遣いは、ペトロの言葉と似ており、主が「私の聖所から始めよ」と言われたことが共通しています。... 言葉遣いは似ていますが、神学的には実際にはまったく異なります。エゼキエルでは反逆する罪人たちが滅ぼされますが、ペテロでは裁きは義なる者の滅びを伴わず、むしろ彼らを練り聖めを伴います。... ペトロの裁きが滅びを伴わないことは、[1 ペテロ 4:]18 の並行する記述からも明らかで、そこでは義なる者は『救われる』と述べられています。すでに 1:6-7 で見たように、義なる者の試練や困難は、信徒を聖め、精錬するために計画されており、最終的な報酬を受けるためのものです (4:12 も参照)。... エゼキエル書 9 章では、裁きは文字通り神殿から始まりますが、今や神の裁きは建物ではなくその民から始まります。神の民から始まる裁きは、真に神に属する者を清め、その清めは苦しみを通して行われ、信者をその相続にふさわしい道徳的に整えます。

ここでの裁きは最終的な裁きです (参照: 1:17; 2:23; 4:5)、しかしこの裁きはすでにこの悪しき現世において始まっています。「私たちが始まる」裁きとは、キリスト者から始まることを意味します。現世において、信者は苦しみを経験しますが、これこそ信者から始まる清めの裁きです。... たとえ救われる者でさえ苦しみによって清められ裁かれるのであれば、福音を拒む者の「結末」(テロス) や結果は、確実により大きな罰となるでしょう。

ヘブル人への手紙 12 章 4-11 節を思い出します。ここでは、神の訓練が、私たちが地上の父親から受けるしつけに例えられています。親からのしつけはその時は痛みを伴うように思えるかもしれませんが、それは私たちを責任ある大人へと形成します。神の訓練も同様です。ヘブル人への手紙 12 章 11 節 — 「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

1 ペテロ 4:19 に行きましょう — 「¹⁹ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。」

神はすべてのことにおいて主権を持っておられます。したがって、私たちに起こるすべてのことは、神によって許されているのです。私たちが忠実で規律ある従者であることが神の御心であり、それは多くの場合、何らかの困難や苦しみ、迫害に耐えることを意味します。神の御心に従って苦しむクリスチャンとは、『キリストの苦しみにあずかる者』(この章の 13 節) であり、『キリストの名のために侮辱される者』(14 節) であり、悪を行ったためではなく、正しいことを行うキリスト者として苦しむ者 (15~16 節) です。私たちは忠実な創造主に魂を委ね、最終的に報いを受けるのです。

4 章の終わりに来ました。今日は学ぶべき主要な教訓の復習で締めくくりたいと思います:

- 効果的な祈りのために健全な判断力を持つこと。
- お互いに愛し、深く熱心に赦すこと。
- 自分の霊的な賜物を実践に移し、キリストの体と呼ばれる教会の共同体を建て上げるのに役立てること。
- 信仰を試し、私たちを精錬するこれらの苦しみに耐えることを喜びなさい。これは神の御心です。
- 法を犯す者としてではなく、キリスト者として正しいことを行ったために苦しみなさい。
- キリストを恥じることをないようにしなさい。
- すべてを忠実な創造主に委ねなさい。